

OUR TENSE

柗木快維

そのつどの春を汀は折るかへす

あたたかな雨やこの世を降る限り

多喜二忌のふらここ濡れてゐても漕ぐ

在廊のごとき日永を賜ひけり

くちづけは昏き署名よ鳥雲に

野遊の誰もにいづれ繋がる血

蝶よ心とたましひを縫ひ綴ぢよ

あらかじめ記憶のやうに花の雨

はだれ野やか灰皿のあまざらし

人死ねば花屋儲かる鳥の恋

燕の巢手紙即赤紙の家

夜吃るやうに夜桜降らしけり

少年をまるごと使ふ蜃気楼

憲法記念日しりとりあつけなく終はる

葉桜や天使は翼から老いて

この薔薇も都市計画のそのひとつ

親しさよ裸足で踏めるものすべて

まだ脳が散らばつてゐる昼寝覚

短夜を生きるとか生き延びるとか

こころてふ幻肢も濡れて水鉄砲

まづ素足狂ふなら透きとほるなら

カフカ忌のサンダルひっかけかけて会はう

五月雨は窓たぶらかす私小説

蛇つひに母語の塔のぼり切つちまふ

いうれいを組み立ててゐる真顔かな

あやめあやめるなないろのあいますく

六月を鏡のさいはてと思ふ

僕たちの計のあふれだす白夜かな

いつまでもねむれる百合の臉なら

鳩の死を驟雨うつとり象れり

百均や白シャツ乾きつつ渴く

どこの誰の棺になつても涼しい木

英霊のくちびるぶ厚くて灼ける

泉まで目隠しされてゐてきれい

虹の晩年なにもない町だけがある

みんなで冷やす抒情の森を抜けた馬

水母ゆゑ空母ゆゑひなたを奪ふ

誘蛾灯ぐらゐの仕組みでも暮らす

裸婦像に糞夥し大西日

グッピーがぷかぷか浮いてゐる自流

晩夏この胸の埠頭の閉ざさるる

うつうつうつせみに鍵なかりけり

さあ泳ぎませう心臓を脱ぐやうに

触れてなほ造花うたがふ秋の雨

何色で描いても霧の思ふ壺

使者も死者もわれの花野へ不時着す

PACHINKO の HIKO が光つてゐる秋だ

陰謀論の粘度で口に残る桃

傘買ふと雨衰へる左右盲

全集にあとがきわづか水の秋

萩やどの写真でも曲げてゐるピース

閉ざされた窓ゆゑ小鳥ばかり来る

くるみわるわるざわーるといずまいん

火恋し付箋に肥らせる聖書

波つねにすでに新たや雁渡る

鶏頭花暴君おほく絵に残り

書くのならみづからの墓洗ふやう

天窓は天と対なす花ひひらぎ

襖の向かうからえいゑんが漏れてくる

凍る噴水それでも集ふこどもたち

火事よ遠くふたりを野次馬に変へる

まなうらに光わづらふ枯木立

千年を森の喃語としてしぐるる

天使みな盲ひて冬の扇風機

耳打ちの息白くそれだけわかる

毛布薄くて僕が絶滅してしまふ

初夢に顔といふ顔略されて

ラガーらは目も口も閉ぢ唱ふなり

天国に国会のある曇かな

凍蝶や拭つても拭つても指紋

総統は鏡の奥を着ぶくれる

溺れるる白鳥己が血だまりに

うつくしく怒り疲れて冬向日葵

鶴の眼のそつと調律されてをり

逆光の枯野で宿題をしまふ

とほく鮫飼ひ殺すひとひらの不眠

猟犬に晩年といふ力かな

かつて首都だった瓦礫の山眠る

悴んでゐる一塊の海のうへ

われはわれを娶りたし火のやうな雪

氷柱いまてるると滴れり

風に影ぼくらはかんたんな廢墟